

シラパコーン大学創立60周年記念国際交流展

SILPAKORN UNIVERSITY establishment 60th anniversary commemoration international exchange exhibition

キーワード：
シラパコーン大学
デコレイティブ
造形
交際交流展

タイ・バンコク シラパコーン大学 มหาวิทยาลัยศิลปากร は今年創立 60 周年を迎え、シラパコーン大学創立 60 周年記念国際交流展を開催することになった。常葉大学造形学部は、この展覧会に招待を受け、学生作品と教員作品を展示することになった。また、展覧会初日に行われるオープニングや会期中のセミナー発表に 5 名の専任教員が参加をして、両大学との交流を図った。

はじめに

シラパコーン大学ビジュアルデザイン学科の教員と学生が、本年度 2016 年 5 月 23 日・24 日本学に来校した。2 日間の滞在で本学のデジタル表現デザインコースの授業に参加をしてレクチャーを行っていた。

タイの大学とは、以前より造形学部の先生方と交流が多いが、個人的には 2002 年に、タイ・バンコクのラチャパット大学での教員展を最初に、タイを中心にランシット大学やシラパコーン大学、チェンマイ大学、バンコク大学、チュラロコーン大学などの総合大学の美術学部や学科への訪問を行ってきた。目的は、日本の少子化傾向のなかで、美術やデザインの志願者が減少している現在、大学における美術やデザインの授業作品のクオリティーや授業形態の観察である。

シラパコーン大学 60 周年記念展覧会について会議への出席依頼があったので、2016 年 3 月にビジュアルコミュニケーション学科の会議に参加した。学科長チャニサー先生はイラストレーションが専門で、日本のデザインに対しては大変好意的である。2014 年 12 月にシラパコーン大学を訪問したときから 3 回目の会見になる。また、同大学のチャイヨット先生（専門は建築）早稲田大学に長期留学経験があり日本語が堪能であるため、国際交流で相互の橋渡しのような役割を積極的に担っている。

会 場

タイ・バンコク BACC (Bangkok Art and Culture Centre) 3 階
<http://www.bacc.or.th>

会 期

2016 年 6 月 1 日（水）～ 6 月 12 日（日）
オープニング：2016 年 6 月 1 日（水）

展示飾付

2016 年 5 月 30 日（月）9：00～21：00

主 催

Silpakorn University シラパコーン大学 <http://www.su.ac.th>

Faculty of Decorative Arts デコレイティブ学部
<http://decorate.su.ac.th/en/>

- Interior Design • Product Design
- Ceramics • Fashion Design
- Visual Communication Design
- Applied Art Studies • Jewelry Design

展示作品

デコレイティブ学部卒業制作展学生作品 300 点

海外参加大学

Tokoha University 常葉大学（日本）
Birmingham City University バーミンガム大学（イギリス）
<http://www.bcu.ac.uk/about-us/maps-and-campuses/city-north-campus>

〈本学作品出品者〉 教員 10 点 〈学生作品〉 16 点
合津正之助(造形) 夏池 篤(造形)
加藤 之敏(造形) 蜂谷 充志(造形)
山本 浩二(造形) PONGVARUT JIRAYU(造形)
長橋 秀樹(教育) 三原 信彦(保育)
黒住 政男(非常勤)
キム・ミンジ(非常勤)

〈バンコク渡航者〉

合津正之助(造形) 加藤 之敏(造形) 山本 浩二(造形)
長橋 秀樹(教育) PONGVARUT JIRAYU(造形)
黒住 政男(非常勤) キム・ミンジ(非常勤)



BSCC 展示会場



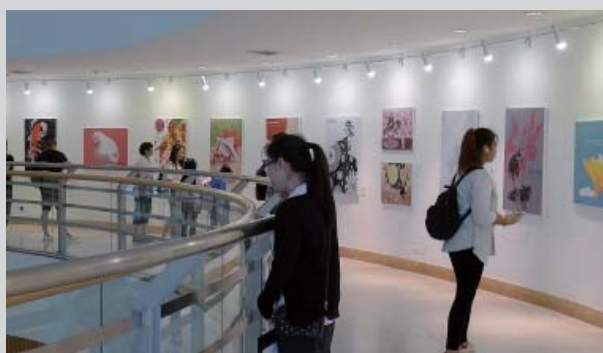
作品展示会場



常葉大学教員作品



BSCC からの景色



常葉大学学生作品



合津学部長とシラパコーン大学学部長・学科長



常葉大学学生作品

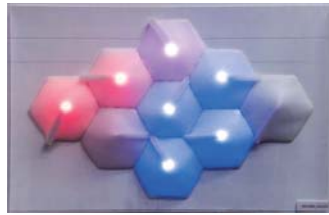


BSCC 展示会場内





合津正之助
The landscape from which a tree of
Yew(Taxusbaccata) grows.



夏池 篤
Life_Clock.....Thailand



蜂谷 充志
View 2015, Disappear from memory.



キム・ミンジ
Life in Tokyo Kichijoji



加藤 之敏
We don't know war



チラユ・ボンフルット



黒住 政男
memory



山本 浩二
Phlogiston No.198



長橋 秀樹
phantom 051231



三原 信彦
Existence and Nothing



学生作品



学生作品



学生作品



学生作品



学生作品

シラパコーン大学 60 周年記念展覧会 セミナー発表

日時：2016 年 6 月 4 日（土）13：00 ～ 16：30

会場：BACC 1F

テーマ Story telling

常葉大学：2016 年 6 月 4 日（土） 15：00 ～ 参加者
92 名

合津正之助（造形学部部長）大学紹介及び大学の新たな
取り組みとデザインの可能性と松崎町包括連携協定につ
いて

チラユ・ポンワルット（造形学部講師）

松崎町概要・ブランディングについて

関連イベントのセミナーの開催では、合津学部長とチ
ラユ先生の松崎町との包括連携協定についてプレゼン
テーションを行い、多くの質問があつまり関心の高さ
を感じました。



セミナー発表 合津学部長



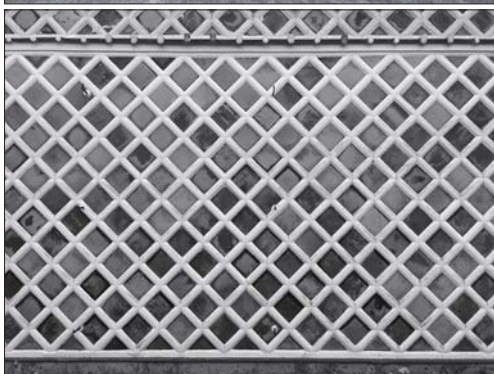
セミナー発表 パーミンガムシティ大学



セミナー発表 チラユ先生



シラパコーン大学学長と合津学部長



タイ・シラパコーン大学 60 周年記念国際展覧会 セミナー

「常葉大学造形学部セミナー：大学の 新たな取組とデザインの可能性につ いて」

常葉大学造形学部長 合津 正之助

1. 日時：2016 年 6 月 4 日（土）14：00～16：00
2. 場所：タイ・バンコク、BACC（バンコク・アート・カルチャー・センター）多目的ホール
3. セミナー概略：

シラパコーン大学創立 60 周年記念事業である、ビジュアル・デザイン・コミュニケーション学科の卒業制作展および国際展覧会の共催事業として開催されたセミナーである。展覧会に招待された常葉大学造形学部（日本）とバーミンガム・シティ大学美術学部（英国）、そして主催大学のシラパコーン大学それぞれが、高等教育機関としての特徴的な教育の取組み等をセミナー形式での発表を行った。

まずシラパコーン大学の映像、音楽、タイの伝統文化、ビジュアルデザイン等がコラボレートされたアニメーションを中心とした取組みの発表があり、次にバーミンガム・シティ大学の「場」や建築物等と個人との関りにおける表現活動の紹介、そして本学の地域貢献コンセプトからの試みであるデザインと社会のかかわりの新たな可能性を探る活動を発表した。

4. 「大学の新たな取組とデザインの可能性について」の内容（口頭発表のため口語体表記である。）記念展覧会にお呼びいただき、教員および学生の作品を展示し、バンコクの人たちに見ただけのことと、今回のセミナーを行えることを心から悦ばしく思います。1 年前、常葉大学でカニッタ先生のセミナーを実施していただき、学生をはじめ、教員にも刺激とクリエイティブへの新たな思いを呼び起こしていただきました。あらためて感謝申し上げます。「コックンカップ」本日の常葉大学のセミナーは、デザインの新しい可能性を探るプロジェクトの紹介です。「物作り日本」に必要であった「求められるデザイン」から、社会との関わりを求め、社会を変えるデザイン、つまり、「物質による行動デザイン」から「思考による行動デザイン」という新たな時代の新たなデザイン力の提案である、本学部の取り組みの 1 つをチラユ先生から紹介します。

まず、このような方向性に至った日本と本学部の状況等から、簡単に説明します。

（1）常葉大学造形学部の現状

（日本の美術・デザイン系大学、学部への進学事情を踏まえて）・10 年前、2 万人以上の美術・デザイン系

大学・学部を目指す高校生（受験生）がいました。現在は、子どもの数も減っていますが（少子化）、経済状況（社会状況と授業料等の学納金の高額化）等の関係から、約 1 万 6,000 人代まで減りました。さらに新設された美術・デザイン系学部もあり、日本全体で美術・デザイン系学部の受け入れる定員は増えました。そのため、入学者定員が欠ける美術・デザイン系学部を有する大学も出てきています。

しかし本学部は、地方（首都圏や大都市圏以外）の大学には珍しく、本学部の 4 コース（アート表現・ビジュアルデザイン・デジタル表現デザイン・環境デザイン）において は、コースによって違いますが、2.5～8 倍の競争率で、入学者を選抜することができています。（競争原理による優秀な学生の確保）

（2）常葉大学がある静岡の特徴

・東京や名古屋、横浜などの大都会に近く、若者の大学志向は、そちらを向いている。さらに静岡県内の大学すべての学部定員を合わせても、県内の大学進学希望者の 25%を賄うことしかできません。

しかし、地元で就職したい希望を持っている、地元志向の強い若者もいる。

・大学と学部の認知度を高めるために、教員と学生たちが地域に役立ち、地域を巻き込み、地域を活性化するプロジェクトをカリキュラムに導入しました。産業、企業、行政（県、市、町など）も地域社会の構成員として考え、協働、ともに働き合い、活躍し合えるプロジェクトです。（地域貢献プロジェクト）

・教育効果を考えカリキュラムにおいては、社会と関わる生きて役に立つ教材・課題の位置付けをしました。

・結果として、マスメディア等に取り上げられたことで認知され、知名度も上がり、教育効果も高まり、学生自身のスキルアップにつながり、就職の結果へ結びつきました。

（3）日本では、大学の 3 つのポリシーが重要視されています。

・3 つのポリシー：アドミッション・ポリシー（A.P.）、カリキュラム・ポリシー（C.P.）、ディプロマ・ポリシー（D.P.）

・A.P.：造形学部は、造形的な専門性以上に、社会人として求められる基礎・基本、人間力を身につけ、造形芸術を通して社会に貢献しようとする高い志と意欲を持つ者、自立した人間として、他者や取り巻く環境と協調・協働しながら、芸術的創造活動の展開ができる基本的な素養を備える者、そして、造形芸術を学ぶ意欲にあふれ、使命感を持って社会貢献を目指す学生を求めています。

・C.P.：全学年にわたり専門分野の実技と理論を、基礎から高度な内容まで、バランスよく段階的に履修す

ることを基本に配置する。主として学部共通科目と専攻科目からなり、学部共通科目は、造形に関する広い視野と創造的な思考が可能になるよう諸科目を配置し、特に「卒業制作」は、4年間の学修の集大成を作品として結実する必修科目としています。専攻科目は、専攻する分野についての深い知識・理解と高度な技能・表現の養成を目的に諸科目を配置し、その中心となる演習および実技・実習科目では、理論科目で習得した知識を基盤としつつ、技術、表現力等を十分発揮できるように、時間をかけて徹底した個別指導を行っています。

・D.P.: 知識・理解; 人間と社会の在り方に直結した造形活動の意義を考察できる力を身につけることです。

思考・判断; 人間と社会における様々な問題について考察し、モノや情報を生み出す造形活動について幅広い視野で適切な対応を考えることができることです。

関心・意欲; 造形表現活動などの自己探求および市民生活や経済活動に対する観察や分析を継続する中で課題を明確にして、理論と実践を結びつけた主体的かつ自律的な学修および行動ができることです。

態度; 他者や地域社会と多様な価値観を共有しながら、実践的に自らを発信できることです。

技能・表現; 国家・社会・地域の文化振興に造形活動を通して貢献するために、高度な技能をもって豊かな表現を行うことができることです。

・簡単にまとめますと、「造形の教育」と「造形による教育」、つまり、専門性の確立と豊かな人間性の向上ということです。私たちは基礎・基本を身につけ、専門を探究することに、教員が深く関わり支援することで、人間性の向上を図る実践をしています。

(4) 常葉大学の教育方針と造形学部の方向性

・知徳兼備（知性とモラルを共に備わっている）
・未来志向（希望を持ち目標を掲げ、未来を見つめる）
・地域貢献（地域や社会に役立つこと）学部として、学生が社会と関わり、地域社会や企業と連携しながら、地域の発展成長に貢献していきます。そして地域社会の中枢を担うべき、人材として地域力を高めていくことであると解釈しました。

以上の方針の中で、今日大学・学長が、最も力を入れていることが地域貢献です。

・本学部は、その先端に立って活動していると自負しています。

・また地域という考え方の中には、国際社会における地域という考えがあり、その1つが国際交流による、海外における地域貢献があります。本学部にとっては、まだまだ具体的事項を見出すこともできず、暗中模索の状態で行っています。今回のこの展覧会参加やセミナーにおける提案が、第一歩となることを願っています。

おります。

以上、簡単に分からない説明であったかと思いますが、引き続き、実践報告としてのチラユ先生の取り組みにより、少しでも理解いただければ幸いです。

さらに、今日のこのセミナーを機に常葉大学造形学部に興味・関心を持っていただければと思います。

来年度本学部は、新体制から15年、短期大学部時代から50年余の時がたちました。そのことを記念して、展覧会等を企画したいと思っています。今は具体的なことは決まっておりませんが、提携・協定締結後、お誘いしたいと考えております。

今後とも、末永いお付き合いが両校で交わされることを心より望んでおりますし、今回のことを含めて、学長、副学長はもとより、学部を含めまして、大学全体に報告させていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

シラパコーン大学視察（修復研究室・ 絵画研究室・版画研究室）実施報告

長橋秀樹（教育学部）

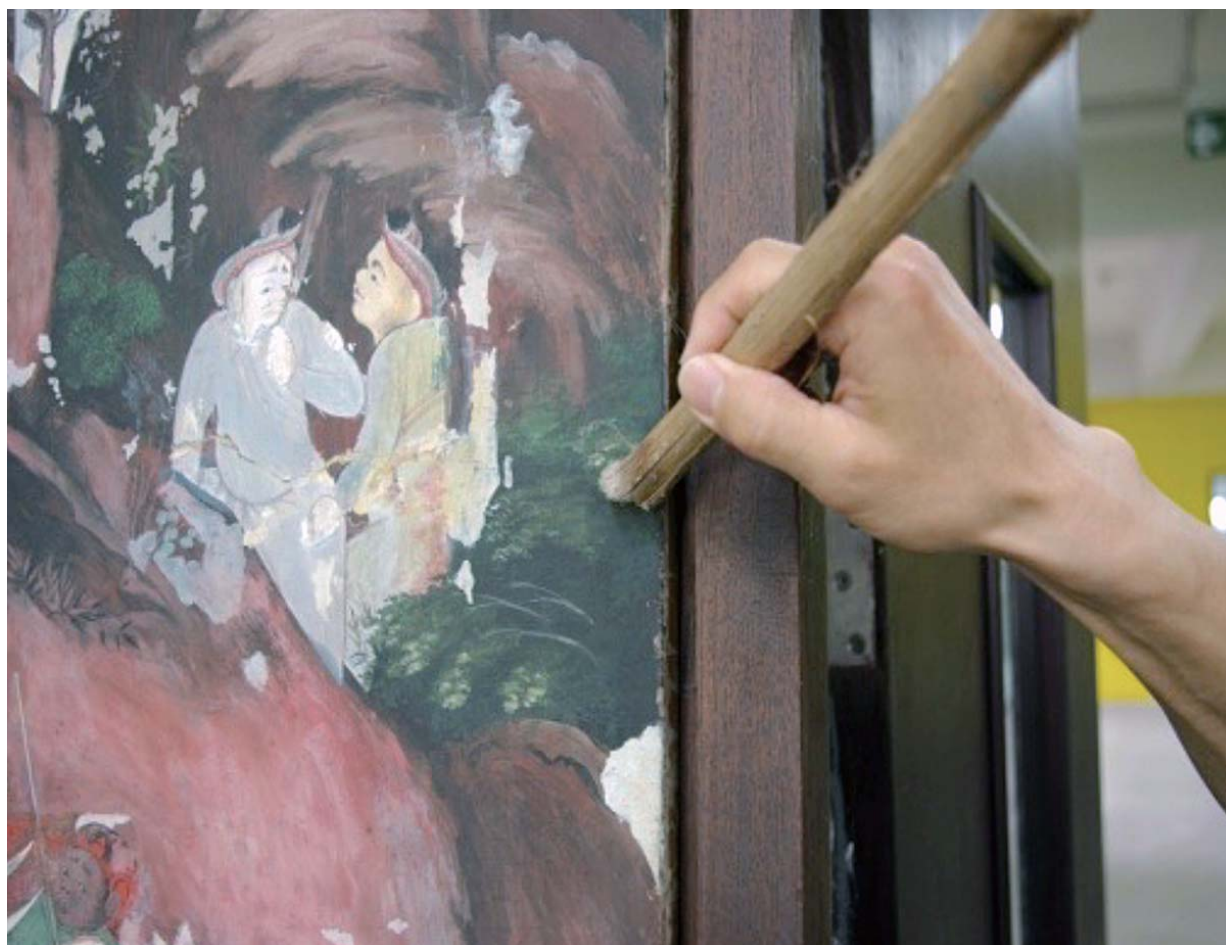
我々はタイに入国後の6月1日、バンコク郊外に位置するシラパコーン大学を訪問。当学では、キャンパス内の絵画棟を視察。

まず、広々とした修復研究室を訪れる。床はコンクリート敷で高温多湿の為の対策なのだろう。室内では二名の学生が作業に当たっていた。我々は常設されていた修復画を当校勤務10年になるチャン先生に案内される。修復されている対象は、タイ国内のワットラカン地方の19世紀初頭に描かれた壁画でスタッコ塗りの下地に描かれたものである。これらの技法は中国から伝来しているという。さらに地域により画面構成に差異が見られ、その表現の手法も異なるようである。具体的な表現の違いには“ラムチャ”という木の枝の木口をほぐして作った筆を使用し、岩肌や木の葉の表現にその多くが見られた。壁画は顔料と展色材（タマリンドという植物の種から抽出される樹脂でカッティン



カッティン

ン【タイ語】と呼ばれる樹脂、日本ではアカシヤという）を配合（樹脂をパウダー状にしてからお湯で溶かす）として作られた絵具で描写されているらしく、同研究室でもこの技法を忠実に復元しながら原寸大で布（素材は不明）にプリントされた支持体に同上の絵具で描写していた。壁画が発見されたワットラカンという地方は川沿いの地方で湿気が多く壁画は腐食や剥落が進み状態は良好ではなく、修復もその腐食や剥落を写真で写しだされたままに描写していた。その他の展



ラムチャ

色材として紹介されたのはFIG（マデュア）という植物性の樹脂で主に金箔を仏像に接着する際に使用されたようである。

タイ視察最終日の6月4日（土）BACC（100名参加）セミナーの中でシリパコーン大学視覚伝達学科とデコラティブアート学部・音楽学部から文化省現代芸術文化事務局と提携し、取り組んでいるプロジェクト「ワッドプレングロムタイ」の発表があった。その主旨はタイの文化的な起源とされている伝統的な子守唄を基に挿絵、音楽の再編曲・再歌唱などの現代的なメディアによって、伝統的で新しいタイの文化を現代から未来

へつなぐもので、これまで22本の音楽アニメーションが作成されている。このプロジェクトは2007年1月1日に「ワッドプレングロムタイ」という展覧会で公開され、配布された作品（DVD：1000枚、絵本＋CD：2000セット、家族メディア用タブレットのアプリケーション）はタイ国内の学校や保護者へ手渡されたようである。

当日、会場のスクリーンには、学生達が作成した家族メディア用タブレットのアプリケーション「プレングロムタイ」と「プレンドックタイ」が上映された。同アプリに登場する、歌手本人（子どもと成人女性）もステージ上に現れ、生の歌声を我々に披露して下

Pleng Klong Thai

Education Media for Children & Family



Present by Chanisa Changadvech,
Creative Director of Wadpleng Klongthai Project,
Chair of Visual Communication Department
Faculty of Decorative Arts, Silpakorn University

さった。発表後の質疑応答の場面で長橋本人から担当の教員に質問を投げかける。

質問内容：プロジェクトのモチーフが子守唄という事で子どもとその家族の関わりが主題になっていると思われるが、今回のプロジェクトに置いて教育学部等との連携があったのか

応答は今後の展開として、その可能性は十分あり、伝統文化と新しいテクノロジーの融合に加えて、教育

或いは家族問題に一石を投じるようなプロジェクトに発展させていきたいとのことであった。

このような応答を受けて、筆者からも担当へ、常葉大学にも造形学部に加えて教育学部・保育学部も備えていることの自覚と、本学もシラパコーン大学の試みに刺激されて、具体的な行動を起こしていきたいとの意向を伝えた。



タイ出張報告

造形学部 山本浩二

5月30日（月）

BACC (Bangkok Art & Culture Center)

BACC はバンコク市内で最も華やかな商業エリアに位置している。総面積が 25,000 平米というタイで最大規模のアートセンターであり、公営のため入館料は無料である。シラパコーン大学は毎年ここで卒業制作展を実施しているが、2016 年度は創立 60 周年記念ということで常葉大学とイギリスのバーミンガムシティ大学が招待され、作品展示を行った。

建物の中には円形の巨大な吹き抜けがあり、それを取り囲む 3 階から 5 階までの回廊壁面と 1 階及び地下 1 階フロア、4 階にあるスタジオが展示会場となった。地下 1 階はシラパコーン大学の陶芸、映像アニメー

ション、インテリアデザインの各展示、1 階は応用美術とジュエリーの展示、3 階は常葉大学の展示、4 階はバーミンガムシティ大学とシラパコーン大学のビジュアルデザインの展示、スタジオはシラパコーン大学のプロダクトデザインの展示である。この施設には図書館、ギャラリー、ショップ、カフェもあり、交通の便の良さもあってひっきりなしに人が出入りしている。

3 階から 5 階の壁面はほとんどが平面作品で、専属のスタッフがコンクリートの壁にアンカーボルトを打ち、紐で固定したのち全作品に光が当たるよう照明器具を設置した。1 階と地下 1 階は立体作品主体で、ジュエリー作品はアクリルケースに入れての展示である。インテリアデザインのパース画は技量が高い反面どの作品も似通っており、一様にホテルのロビーを想定しているように見えた。両国の招待教員は作品の前で自作についてのコメントを収録し、搬入日の夜には facebook に動画がアップされた。



BACC での展示

5月31日(火)

18:00よりBACCにてオープニングレセプションが開催された。シラパコーン大学の理事長、美術学部長が列席し、セレモニーの後は学生作品によるファッションショーが行われた。はじめファッションデザインコース、続いてジュエリーデザインコースの学生作品を身につけた外国人モデルが登場し、本格的な



ファッションショー

ショーの中で作品が披露された。特にジュエリーデザインのモデルはモノトーンのシンプルなコスチュームを着用し、ジュエリーの装飾効果が良く見えるような工夫が見られた。

ファッションショーの後は観客が各フロアに散らばり、展覧会場は大盛況となった。学生の友人、家族だけでなくOBにも告知されており、人を集めるイベントを組み込むことはオープニングの華やかさを演出する上で非常に効果的だといえる。

6月1日(水) アートプロジェクト「環境の美」

シラパコーン大学建築科のチャイヨット教授の案内により、バンコク郊外で進行中のアートプロジェクトを見学した。制作しているのは大学講師のウィティット氏で、元々版画が専門だが博士号取得のために1年間の期間限定の制作として取り組んでいる。このプロジェクトは「環境の美」と名付けられ、米作りにまつわる様々な要素を時間的、空間的に作品化している。

田んぼの中央に同心円で区切られたスペースがあり、中心部は池になり、蓮の花が咲いている。境界の柵やあずま屋は竹でできているが、現場近くに竹やぶはなく、離れた山から竹を得ているとのことである。コンセプトと制作の過程の映像もDVD化されており、米作りから派生する歌、踊り、グラフィック、造



アートプロジェクト「環境の美」

形などが収められている。エッチングで表現されたイメージドローイングやマケットも展示されており、曼荼羅のように幾何学的に配置された作品の全体像をイメージすることができる。

「環境の美」の制作を通してボランティアスタッフを募り、それまで美術と全く縁がなかった地元の人々や学生がこのプロジェクトに関わるようになった。

6月2日（木）バンコク大学

ランシットキャンパス

バンコク大学は1962年にオーソトサパー社先代会長のスラット・オーサターヌクロ氏がタイで初めての私立大学として創立した。スラット氏は中国陶磁器のコレクターであった父の影響でタイの古陶器を集め、2002年に約2000点のコレクションをバンコク大学に寄贈した。2011年の洪水の際には半地下にある東南アジア陶磁器博物館は約3ヶ月水中に没したがその後再開された。その時の経験を踏まえて、キャンパスの外周には防水壁が設けられている。

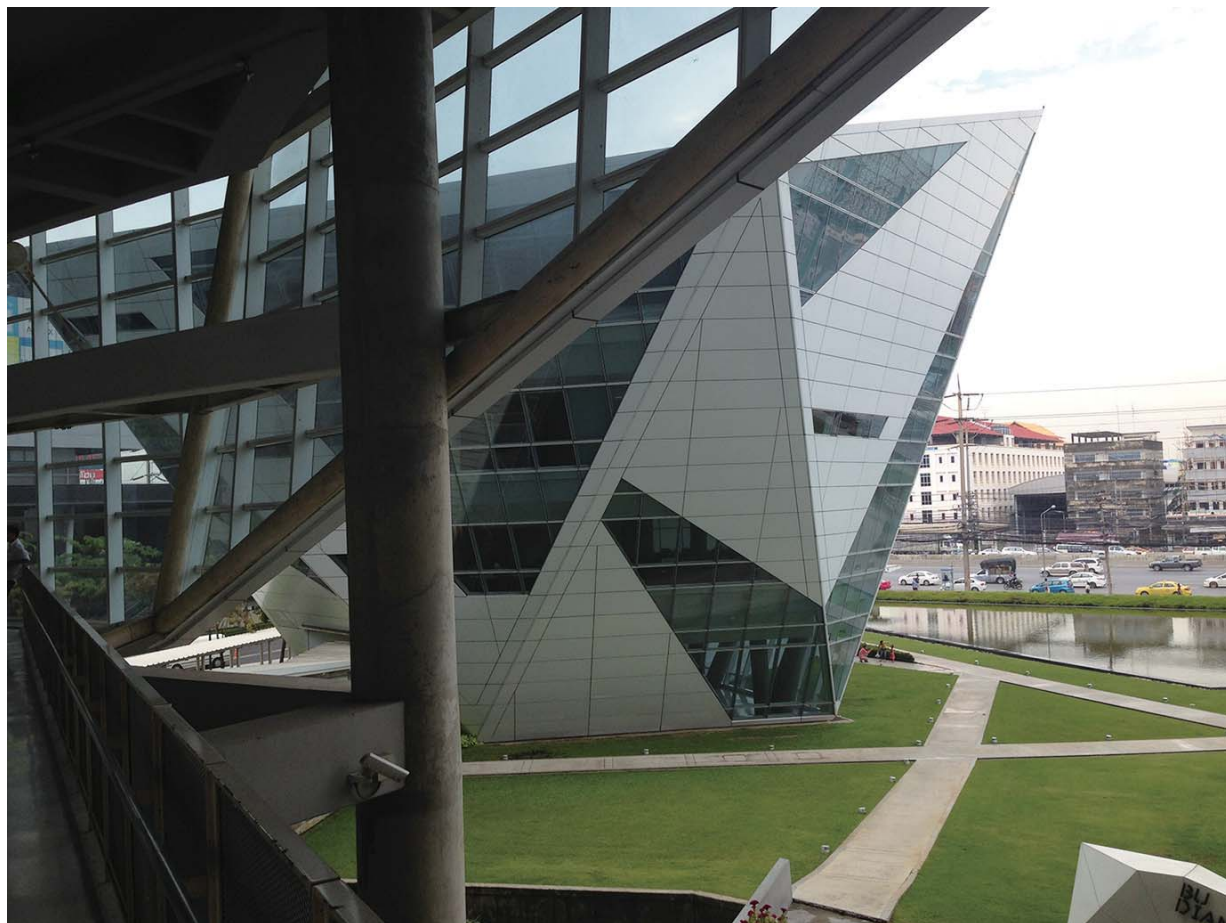
バンコク大学のサンサーン芸術学部長をはじめ11

名の教員とのミーティングではバンコク大学の紹介と簡単な質疑応答の後、学生の交換留学についての話し合いが持たれた。双方の大学の学期日程や単位認定についての検討を経て、日本に持ち帰り大学本部に報告するという流れとなった。

カンファレンスルームの隣にはギャラリースペースがあり、バンコク大学出身のアーティストによる展覧会「THE 4th BANGKOK CREATIVE



東南アジア陶磁器博物館



建築棟 通称「ダイヤモンド」



プリントセンター

EXHIBITION」が開催されていた。バンコク大学のコミュニケーションデザイン学科は学生数が5,000人なので小さいギャラリースペースでは卒展が開催できないため、巨大な見本市会場を使っている。

その後ファッション、デザイン棟を見学、工芸関係の学科はないが、基礎カリキュラムの中で手仕事によるデザインの課題を取り入れており、廊下や階段には繊維で織ることをテーマとした課題作品や伝統的な手工芸の課題作品が展示されている。メディアラボにはMacがずらりと並び、作成したデータはプリントセンターで学生が自費で出力することができる。ファッションデザインスタジオにはミシンが多数設置されており、講義やディスカッションなど多目的に使える教

室もある。隣の棟には金属や木工のスタジオもあり、学生が望めばそこで制作することも可能である。

建築学部が入っている建物は通称「ダイヤモンド」と呼ばれており、斜めになった壁や柱が近代的な印象を与えている。この棟には学生ホールがあり、創造性を刺激する色鮮やかなテーマパークのような設備で満たされている。この大学の各棟入り口には著名人の言葉が刻まれており、どれも創造性について言及する内容である。この棟の設計がユニークであるという点からも、バンコク大学がいかに学生の創造力を鍛えることに注力しているかという教育ポリシーが見て取れる。サンサーン学部長はバンコク大学クリエイティビティーセンターのディレクターでもあり、各科から選抜された18名の学生たちとともに社会の中で様々なプロジェクトに取り組んでいる。

6月3日(金) THE JAM FACTORY

チャオプラヤ川の近くにあった倉庫を改造してできたTHE JAM FACTORYはデザイン事務所、ギャラリー、書店、セレクトショップ、カフェが一体となった施設で、タイを代表する建築家・デザイナーのドゥアングリット・ブンナグ氏が2年前にリノベーションを行った。ギャラリーではバンコク大学出身でグラフィックデザイナーのサンティ・ラウラチャウィー氏を中心とする8名のアーティストによるグループ展「REWIND TO THE NEXT」が開催されており、展示会のコンセプトについてお話を伺うことができた。フィボナッチ数列が作り出す幾何図形を共通の造形要素として、様々なグラフィック表現に展開させることがテーマとなっており、サンティ氏の描いた48枚のドローイングを重ねたポスターやカードも販売している。



「ダイヤモンド」内にある学生ラウンジ



「REWIND TO THE NEXT」展

6月4日（土）シラパコーン大学

シラパコーン大学に隣接する彫刻博物館は創設者シン・ピーラシーの作品をはじめとした大小様々な彫刻作品が収蔵されている。タイ国内の公共の場に設置された肖像彫刻が主体で、ブロンズ作品もあるが多くの

その石膏原型であり、大石膏室といった印象でもある。ブロンズ鑄造の工程について、原型の骨組みから型作り、溶解炉などの立体模型でわかりやすく展示している。この博物館はタイの芸術局が管理している。



シラパコーン大学に隣接する彫刻博物館